

大分県立図書館蔵「碩田叢史」所収  
『金槐和歌集佳調抜』の本文について

犬井 善壽

〈 一 〉

大分県立図書館の郷土資料室に、幕末から明治初期にかけてこの地において歴史・地史・文学等に関する文筆活動に活躍した、天領乙津村（現、大分市）の富豪、後藤真守<sup>1)</sup>（号、碩田。文化七年1805—明治十五年1882）の蒐集・書写・抄出になる、「碩田叢史」二二九巻が蔵されている。その内の第二二六巻に、『金槐和歌集』の抜粋本である、『金槐和歌集佳調抜』が収められている。

その第二二六巻は、外題として、子持ち匡郭のある題箋に、

碩田叢史 鎌倉右大臣家集 他五種

と墨書されている。又、この巻の扉の第一丁表に記された「目録」には、

目録

- 一 鎌倉右大臣家集
- 一 袋法師繪巻物詞書
- 一 甲陽隨筆抜書
- 一 宝其角義士逸事文
- 一 頼山陽其角父を見て詫詩 詩ハなし（下四文字、細字。稿者注）
- 一 明帝寄豊公勅書

以上

後藤真守集蔵（碩田典印ノ印アリ。稿者注）

とある。この巻は都合三十丁に六本の資料を収めているのである。

冒頭の「鎌倉右大臣家集」は、まず第二丁表から第四丁表までの二丁半五面にわたり、

鎌倉の右大臣の家集をよみて書つ / 加茂真淵 (ノハ改行)

と題する文が載る。第四丁裏は一面空白で、第五丁表から、

金槐和歌集 佳調抜 / 春部 鎌倉右大臣実朝公歌集

という内題と部立名を置き、以下第十丁裏まで、六丁にわたり、『金槐和歌集』の歌を写している。詞書は上小口に配し、歌は一行取りである。そして、本文の末尾に、書写奥書、

天保五年歳三月壹日鶴崎安達氏の藏書を以寫者也 / 後藤真守

がある。天保五年1834に後藤真守（碩田）が書写したものである。

題箋にも目録にも「鎌倉右大臣家集」とあり、内題は「金槐和歌集」と「佳調抜」との間に一字分の空白がある。この書の書名は『鎌倉右大臣家集』もしくは『金槐和歌集』と見るべきであり、「佳調抜」は言わば副題ではあるが、今は、『金槐和歌集』の他の諸本と区別するため、又、抜粋本であることを明示するため、副題を併せて、『金槐和歌集佳調抜』と呼ぶことにする。本稿においては『佳調抜』と略称する。

『国書総目録』<sup>2)</sup>（昭和三十九年八月刊）は、この巻の冒頭の「鎌倉の右大臣の家集をよみて書つ」を「鎌倉右大臣集をよみていへる」という書名の文献とし、『金槐和歌集佳調抜』とは別の扱いをしている。これは、昭和五八年刊の『大分県立図書館蔵書目録』<sup>3)</sup>第二巻がこれを別々の文献としているように、所蔵者大分県立図書館においてこれが二点の別文献と扱われていること、前述のように、「鎌倉の右大臣の家集をよみて書つ」の後に一面の空白があること、また、「鎌倉右大臣集をよみていへる」のみを単

独で扱った『真淵家集』の写本が天理図書館に蔵されていること、<sup>(2)</sup>などが、これを別の二文献とされた理由であらう。

しかし、後藤碩田の書写した大分県立図書館現蔵「碩田叢史」第二二六卷所収の文献としては、「鎌倉の右大臣の家集をよみて書つ」と「金槐和歌集 佳調抜」とを別々の二文献と見る必要はない。なぜなら、題箋には「鎌倉右大臣家集 他五種」と都合六本の文献を収めることが明示されており、目録には「鎌倉右大臣家集」を含めて六本の文献名が掲げられているのであるから。これを二点と数えると、題箋には「他六種」とあるべきで、目録も都合七本の文献名が掲げられて然るべきである。

因みに、この『鎌倉右大臣家集』に続く『袋法師繪巻物詞書』は、面を変えたのみで、空白面を置かない。「碩田叢史」諸巻で複数の文献を収めている他の巻を見ても、別文献に移る際に空白面を置くという原則はない。「鎌倉の右大臣の家集をよみて書つ」と「金槐和歌集 佳調抜」との間の一面の空白は、前後が別文献であることの提示ではない。

『金槐和歌集佳調抜』は「鎌倉の右大臣の家集をよみて書つ」と「金槐和歌集 佳調抜」との二部から成る、と見ておけばよからう。

この『金槐和歌集佳調抜』に収められている歌の総所載数は、先に、「抜粋諸系統『金槐和歌集』歌番号対照表——柳営巫槐本系統賀茂真淵評語本との比較——」<sup>(3)</sup>において示したように、一六四首である。それを、

春部・夏部・秋部・冬部・恋部・雑部

の六部に部類している。『金槐和歌集』諸本は定家所伝本系統と柳営巫槐本系統の大別二系統の本文が伝わっており、この部類は、両系統の中の柳営巫槐本系統諸本と同一である。所載歌は減るが、歌の配列も柳営巫槐本系統の歌順のままであり、歌順がその系統と逆になることはない。『金槐

和歌集』のいま一つの主要本文である定家所伝本系統(群書類従本の一種を含める)とは、部類・歌順の点で、全く異なっている。

つまり、『金槐和歌集佳調抜』は、『金槐和歌集』の中の柳営巫槐本系統の本文から歌を抜いたもの、と違って間違いない。

本稿において、いまま少し細部にわたって『金槐和歌集佳調抜』の本文を検討し、後藤碩田が「碩田叢史」に書写したこの書の本文と、柳営巫槐本系統の低位分類である貞享版行本系列・真淵評語本系列・中川文庫本系列の本文との関係を明かにする。『金槐和歌集』の抜粋本諸系統の本文の在りようの解明を目指す、前掲拙稿に続く報告の一端である。

なお、定家所伝本系統『金槐和歌集』(略号・定家)や柳営巫槐本系統『金槐和歌集』(略号・柳営)等を参照することがある。それぞれ、『私家集大成 中世』<sup>(4)</sup>所収の定家所伝本および貞享四年版行本に拠る。

～ 二 ～

最初に、この書の歌本文『佳調抜』の冒頭一〇首を掲げ、『金槐和歌集』の定家所伝本系統・柳営巫槐本系統の所載歌との関係を明らかにする。上小口の詞書は、歌集の一般的な位置に置いて引用する(漏点、稿者)。

春のはじめ歌

一 九重の雲ゐに春や立ぬらむ大裏山に霞たなびく

(柳営 二・定家 二)

故郷立春

二 はるがすみたてるをみればみよしのゝ吉のゝ宮に春は来にけり

(柳営 七・定家 三)

鶯

三 くさぶかき霞の谷にはぐままる鶯のみやむかしこふらん

雪中若菜

(柳營 一四・定家五四〇)

四 わかなつむ衣手ぬれてかた岡のあしたの原に淡雪ぞふる

(柳營 一七・定家 一〇〇)

梅の花をよめる

五 春かぜはふけどふかねど梅の花さけるあたりはしる人ぞ有ける

(柳營 二三・定家 一八)

梅花風に匂ふといふ事を入々によませ侍し次に

六 このねぬる朝けの風にかをるなり軒ばの梅のはるのはつ花

(柳營 三五・定家 一六)

雨中柳

七 水たまる池のつゝみのさし柳この春雨に萌いでにけり

(柳營 四二・定家 二二五)

花をよめる

八 桜花ちらまくをしとうちひさすみやちの人ぞとのゐしりけり

(柳營 四五・定家 六三)

九 さくら花ちらばをしけむ玉ぼこのみちゆきぶりに折てかざむ

(柳營 四六・定家 六四)

ゆみあそびせしに芳野山のかたをつくり山人の花見たる所  
をよめる

一〇 みよしのゝ山に入れむ山人となり見てしがなはなにあてく

(柳營 四九・定家 五九)

歌の末尾に添えた柳營重槐本系統と定家所伝本系統の歌番号を一見するのみで、『佳調抜』は、柳營重槐本系統の歌順と逆行することはないこと、

定家所伝本系統の歌順とは全く異なること、が明らかである。尤も、柳營重槐本系統とは本文に小異がある。例えば、五番の末句「しる人ぞ有ける」は、他本は「しるくぞありける」(貞享四年版行本)であり、誤写である。かような例は散見するが、『佳調抜』は、柳營重槐本系統の本文から順に歌を抜粋したものと見てよいのである。

抜粋という所為は、所拠本文を大幅に変え、筆写者流の本文を著作する意識のもとでの書写である。これを稿者は著作性本文形成と呼ぶ。五番歌に見るとき誤写は、そうして、誤脱や小規模の改変・修正は、著作するという意識ではなく、所拠本をできるだけ正確に書写するという意識のもとで生じる本文変化である。こちらは、書写性本文変化と呼ぶ。『佳調抜』は、柳營重槐本系統の本文に抜粋という著作性本文形成を行なった、時に、書写性本文変化が生じている、と把握できる。

三

次に、『金槐和歌集佳調抜』の所載歌を確認することによって、この書は管見に入った他の三つの抜粋諸系統、

西尾市岩瀬文庫蔵本および東海大学附属図書館蔵桃園文庫「叫芳亭叢書」所収本 『金槐和歌集秀逸』 (略号・秀逸)

岩波文庫『金槐和歌集』所収三輪田高房蔵『鎌倉右大臣家集中抜粋』 (略号・抜粋)

学習院図書館蔵「千載館抄書」所収 『鎌倉右府家集抄出』 (略号・抄出)

とは直接の書承関係がないことを確認する——この件は前掲拙稿「抜粋諸系統『金槐和歌集』歌番号対照表」において結論のみ略述したが——。

『秀逸』『抜粋』『抄出』の抜粋三系統が抜粋していない歌で、『佳調抜』

のみが抜粹している歌が九首ある。『佳調抜』の本文を示すと、以下のとおりである。先と同様、上小口の詞書は普通の体裁で引く。

春のはじめ歌

一 九重の雲に春や立ぬらむ大裏山に霞たなびく

(柳営 二・定家 二二)

屏風の繪に旅人あまた花の下にふせる處

一 木のもとの花のしたぶし夜ごろへて我衣手にはなはちりつゝ

(柳営 六二・定家 五二)

湖邊落花

一 二 山かぜのさくらふきまきちる花のみだれてみゆるしがのうら波

(柳営 七七・定家 八八)

鹿哥に

四八 はぎが花うつろひ行ば高砂のをのしかのなかぬ日ぞなき

(柳営二四二・定家一九三)

四九 あさなく露におれふすあきはぎの花ふみしだき鹿ぞなくなる

(柳営二四三・定家一九二)

名所恋の心をよめる(九六番詞書)

一〇二 しらなみのいそくちなるのもせ川のちもあひみん身をしたえずは

(柳営四八一・定家五〇一)

寄風恋

一一一 から衣すそあはぬつまにふくかせのめにこそみえね身にはしみ

(柳営五二七・定家 不載)

旅宿釋

一二五 しながどりぬなのゝはらの篠まくらまくらのつゆややどる月か

(柳営五八三・定家五二四)

屏風歌

一五七 とよくにのきくのはま松おいにけりしらすいくよの年かへにけ

む

(柳営六九一・定家五九〇)

これらは、『佳調抜』が抜粹三系統に拠ったのではなく、『金槐和歌集』柳営重本系統のごとき本文から歌を抜いたか、管見に入らない所在の知らない実朝家集に拠ったか、いずれかであることを示している。

因みに、柳営重本系統の真淵評語本系列諸本の歌の中には真淵の合点が付されているものがあるのだが、『佳調抜』の一・一一・一五七は、どの本にも歌頭の合点がない(前掲、拙稿「抜粹諸系統『金槐和歌集』歌番号対照表」の「真淵評語本合点等」の欄、参照)。又、一二は茨城大学附属図書館蔵菅文庫本・東京大学総合図書館蔵南葵文庫本・上田図書館蔵藤蘆文庫本・筑波大学附属図書館蔵本の中に、四八は静嘉堂文庫蔵本・彰考館文庫蔵小山田与清写本の中に、一一は静嘉堂文庫蔵本・彰考館文庫蔵小山田与清写本・筑波大学附属図書館蔵本・鹿児島大学附属図書館蔵玉里文庫本の中に、真淵の合点がある。四九と一二五の二首は多くの本に合点がある。抜粹本諸系統は真淵評語本の合点のある歌を抜くことが多く、この二首はそれらと共通しているが、『佳調抜』のみが抜粹している九首の歌は、真淵評語本に合点がない歌あるいは合点を付す本がごく少ない歌ということになる。

この九首とは逆に、『佳調抜』には載らず、他の全ての抜粹系統には載る歌がある。例えば、柳営重本系統の第一番の歌(定家本一番)、

正月一日よめる

一 今朝みれば山も霞て久方のあまの原より春は来にけり

である。ということは、『佳調抜』は『秀逸』『抜粹』『抄出』の抜粹に与

った資料ではありえない、ということになる。かような例が、柳営亜槐本系統の六一（『秀逸』一五・『抜粹』一四・『抄出』二二・七六（『秀逸』一六・『抜粹』一六・『抄出』三）と、他にも見られる。

『秀逸』は『佳調抜』より所載歌が多いが、『佳調抜』所載歌の全てが『秀逸』に含まれるわけではない。『抜粹』『抄出』は『佳調抜』よりも所載歌が少ないが、『佳調抜』所載歌ばかりを載せるわけでもない。

要するに、『佳調抜』に載る歌の中に、他の抜粹系統には載らない歌が見られるのである。この事実は、『佳調抜』が他の抜粹系統から更に抜粹されたものではないことを示している。その事実に、『佳調抜』には載らず他の抜粹系統には載る歌があるという事実を併せ考えると、抜粹四系統はお互いには書承関係はない、と判断して誤りあるまい。

（四）

前述のとおり、『金槐和歌集』の伝本は、大別すると、定家所伝本系統（含、群書類従本の類）と柳営亜槐本系統との二種の本文系統になる。『佳調抜』に載る歌は、詞書も歌本文も、その内の柳営亜槐本系統の本文である。この集に載る歌で、定家所伝本系統と柳営亜槐本系統との間で異文がある場合、多くは柳営亜槐本系統の本文と合致するのである。

款冬をよめる

二〇 玉もかる井手のしがらみ春かけて咲や河せのやまぶぎの花

（柳営一一五・定家一〇六）

の詞書は、『佳調抜』は柳営亜槐本系統と同文で、題詠の扱いである。しかるに、定家所伝本系統は、「山ぶぎのちるを見て」（但、一〇五番詞書）という詞書で、題詠の扱いではなく、非題詠の扱いである。

鹿哥に（但、四八番詞書）

四九 あさな／＼露におれふすあきはぎの花ふみしだき鹿ぞなくなる

（柳営二四三・定家一九二）

の詞書は、定家所伝本系統は「秋哥」という大概を示すものだが、『佳調抜』は柳営亜槐本系統と同文で、「鹿歌に」と素材が限定される。

寄金恋

一一六 金ほるみちのく山にたつたみのいのちもしらぬこひもするかな

（柳営五四二・定家四八七）

の末句「こひもするかな」は、柳営亜槐本系統諸本はすべて『佳調抜』と同文である。しかるに、定家所伝本系統は「こひもするかも」である（定家所伝本系統の群書類従本系列は「こひもするかな」である）。

このように、『佳調抜』に載る歌で定家所伝本系統と柳営亜槐本系統との間で詞書や歌語に相違がある場合、その殆んどが、柳営亜槐本系統の本文と合致する。『佳調抜』は柳営亜槐本系統本文の抜粹と見てよい。

『金槐和歌集』の柳営亜槐本系統は、諸本の間に本文の小異があり、貞享版行本系列・真淵評語本系列・中川文庫本系列に細分出来る。この『佳調抜』に載る歌で貞享版行本系列・真淵評語本系列と中川文庫本系列との間で異文がある場合、『佳調抜』は貞享版行本系列等の本文と合致する。中川文庫本系列の本文とは異なるのである。例えば、

人々哥よみしに經年待恋といふ事を人々におほせてつかう  
まつらせし次に

一〇八 ふるさとのあさぢが露にむすば、れひとり鳴むしの人をうらむ

（柳営五一三・定家四七〇）

の詞書は、貞享版行本系列も真淵評語本系列も同文であるが、中川文庫本系列は、「といふ事を」以下の本文がない。貞享四年版行本等の「人々哥

よみしに」と「人々におほせてつかうまつらせし次に」の詞書は、重複があり、且つ、齟齬がある。貞享四年版本等の加筆過誤であるのか中川文庫本系列の省略修正であるのかは判然としないが、とにかく、『佳調抜』は貞享四年版本や真淵評語本系列の本文と合致するのである。

ある人の都のかたへのぼり侍しにたよりにつけて讀てつかはす

一二八 夜を寒みひとりねざめのとこさえてわがころも手につゆぞおきける  
(柳営五九七・定家六二二)

の第五句「つゆぞおきける」は、貞享版本系列も真淵評語本系列も同文であるが、中川文庫本系列は「霜ぞ置ける」である——真淵評語本系列の中で比較的中川文庫本系列に近い本文の大阪市立大学附属図書館蔵森文庫本のみ、「霜ぞ置ける」——。「露ぞ置ける」「霜ぞ置ける」いずれも歌意はとおるが、この歌の本歌と見てよい『拾遺和歌集』の、

題しらず よみ人しらず

一二八 夜を寒みねざめてきけばをしぞなく払ひもあへず霜やおくらんから見て、「霜ぞ置ける」が妥当である。『佳調抜』は、貞享版本系列や真淵評語本系列の「露や置くらん」を継承しているのである。

寄鴈恋

一一四 忍びあまりこひしき時は天の原そらとぶ鷹のねになきぬべし  
イぞ鳴つる

(柳営五三九・定家四二七)

の第五句右行間に添えられた「イぞ鳴つる」という異本校合は、貞享版本系列と真淵評語本系列の諸本にのみ見られる——宮城県図書館蔵伊達文庫本・東京大学総合図書館蔵文久三年写本・東北大学附属図書館蔵狩野文庫本・国文学研究資料館蔵初雁文庫天保十四年写本には校合がない。東海大学附属図書館蔵桃園文庫本の校合は「ぞなかれつるイ」で、全く別文で

ある——。中川文庫本系列諸本にはこの校合がない。この異文校合の例も、『佳調抜』が『金槐和歌集』柳営並槐本系統の貞享版本系列もしくは真淵評語本系列に拠っていることを示している。

『佳調抜』のみが本文を異にする歌が、数は多くないが、散見する。

春のはじめ歌

一 九重の雲ぬに春や立ぬらむ大裏山に霞たなびく

(柳営 二・定家 二二)

の第二句の「春や」を、定家所伝本系統も柳営並槐本系統他本も谷森本『後葉集』(三三)も、「春ぞ」とし、また、第三句を、管見の全伝本が「たちぬらし」とする——そこに「イぬらん」「んい」と校合を掲げる伝本が、貞享四年版本本・秋田県立図書館蔵本など、かなりあるが——。『千五百番歌合』の春一番左、三宮の歌に、

二 いつしかと雲井にはるやたちぬらんゆきけをこめてかすむ空かな

とあるように、「雲ぬに春や立ぬらむ」という『佳調抜』の字句表現はありうるものであり、この歌に矛盾があるわけではない。意改が行われたか、異本校合を本文に取り込んだか、いずれかであると見てよい。

故郷立春

二 はるがすみだてるをみればみよしの吉の宮に春は来にけり

(柳営 七・定家 三三)

の初句「はるがすみ」は、他本全て、そして『続古今集』(五)・『万代集』(六)・『歌枕名寄』(七八三四)も、「あさがすみ」である。『佳調抜』の「はるがすみ」即ち「春霞」では末句の「春は来にけり」と「春」が一首中で重なり、不適切である。『佳調抜』における、あるいは『佳調抜』に

至る間の、誤写であろう。また、第三句「みよしのゝ」は、『金槐和歌集』の多くの本が、そして『続古今集』・『万代集』・『歌枕名寄』が、「みづのえの」とする——「みよしのの」とするのは秋月郷土館蔵本のみである——。「みづのえの」の行間に「みよしのの」を校合している本が真淵評語本系列の茨城大学附属図書館蔵菅文庫本など数本あり、『佳調抜』がここを「みよしのの」とするのは、さような真淵評語本の書き入れを本文に取り込んだ結果と考えられる。

寄松祝といふ事を(二四六番詞書)

一四八 ゆくすえもかぎりはしらず住吉のまつぞいくよのどしかへぬら  
ん  
(柳營六五九・定家三五七)

の第四句「まつぞいくよの」を、他伝本は「まつにいくよの」とする。「松ぞ」幾世の「(校訂)であれば、「住吉の松」は「幾世の年か経ぬらむ」と疑う意となる。「松」幾世の「(校訂)であれば、日本古典文学大系『金槐和歌集』の頭注に「過去に於て住吉の松の上に幾世の年を経たことであろうか」とあることとき意となる。いずれも歌意は通るが、上句に「行く末も限りは知らず」とあることから、歌意の明解な「住吉の松」を主語とする「ぞ」の方向に意改が行われたものと見える。

要するに、『佳調抜』の独自本文は、意改や真淵評語本の行間書き入れを本文として取り込んだものが多い、と言えそうである。

『佳調抜』の誤謬が明らかかなものもある。尤も、『佳調抜』の所拠本に於ける誤謬であるのか、『佳調抜』形成時の誤謬であるのか、『碩田叢史』の書写時の誤謬であるのか、その辺のところは判然としない。

寄松祝といふ事を(二四六番詞書)

一四七 きみが世はなほしもつきじ住吉のまつぞいくよのどしかへぬら  
ん  
(柳營六五八・定家三五九)

は、柳營匝槐本系統の貞享四年版行本でいうと、「寄松祝といふ事を」の詞書(六五七番)で括られた六五八番の歌であるが、その歌は、

六五八 君が世はなをしもつきじ住吉の松はもゝたびおひかはるとも  
という本文であり、下句が全く異なる。これは、『佳調抜』が下句に移る際に、貞享四年版行本でいうと続いて載る六五九番の歌、

六五九 行末もかぎりはしらず住吉の松にいく世のどしかへぬらん  
の下句を誤って写したと見てよい。「住吉の松」に因る目移りである。ちなみに、『佳調抜』においても、一四七番に続くのは、先に検討した、

一四八 ゆくすえもかぎりはしらず住吉のまつぞいくよのどしかへぬら  
ん  
(柳營六五九・定家三五七)

である。貞享四年版行本のこととき本文に因る目移りであるのか、『佳調抜』の本文に因る目移りであるのか、判然としない。次節において検討する。これ程の大きな誤謬ではないが、『佳調抜』には、誤写が多い。

ゆみあそびせしに芳野山のかたをつくり山人の花見たる所  
をよめる

一〇 みよしのゝ山に入れむ山人となり見てしがなはなにあてやと  
く(朱)  
(柳營 四九・定家 五九)

の末句「はなにあてやと」は意味不明で、「て」の右行間に朱で「く」と注しているように、「こは、「はなにあくやと」つまり「花に飽くやと」とあるべきところである。他の全ての伝本や『続千載集』(九二)も「は

なにあくやと」とする。「久」を字母とする「く」が「天」を字母とする「て」の少々縦に伸びた形に似た字形になった結果生じた、誤写・誤読という誤謬の本文変化と見ることが出来る。

鴈をよめる(四四番詞書)

四六 かり金はともまどはせりしがらきやまきのそま山きりたゝなら  
し  
(柳営三三四・定家二二六)

『佳調抜』には、末句「たゝならし」の左行間に「不知」と書き添えがある。ここは、定家所伝本系統や柳営重槐本系統諸本、それに、『雲葉集』(四四六)・『万代集』(九〇七)の「とく」、「きりたゝるらし」とあるべきところである。「る」(字母「累」と「な」(字母「奈」と)との類似が原因の誤写・誤読という書写性本文変化であると見てよい。

海邊月(五五番詞書)

五六 塩がまのうらふく風にあきたけてま〇のしまに月かたぶきぬ  
かき  
(柳営二八二・定家二一六)

の第四句の「まのしま」は、「ま」の下の行の中央に「〇」印を書き入れて右に「かき」と書き添えているように、「まかきのしま」即ち「籬の島」が妥当である。『佳調抜』は、誤脱が生じ、補ったのである。

霜

六七 難波がたあしの葉しろくおく霜のきえたるよはにたづぞ鳴なる

(柳営三二六・定家三〇八)

の第四句「きえたるよはに」つまり「消えたる夜半に」では、「華の葉が白く置いている霜が消えた夜半に」の意となり、冬の寒さを歌うのが本意の「霜」題の歌にならない。他本は全て「さえたるよはに」つまり「冴えたる夜半に」「冷えたる夜半に」であり、「霜」題の歌として妥当である。

『佳調抜』は「さ」を「き」と誤読・誤写したのである。

寄露恋

一一三 あきはぎの花のゝ薄つをもみおのれしほれてほにや出なむ  
(柳営五三三・定家三八一)

の第三句「つをもみ」は、音数不足である。定家所伝本系統も柳営重槐本系統も「露を重み」(校訂)とする——内閣文庫蔵本は「露おほみ」とし、彰考館文庫蔵本は「露おもみ」とするなど、定家所伝本系統の伝本の中に異文が見られるが——。詞書の「寄露恋」から見ても、「露」の語の欠かせない歌であり、「つゆを」の「ゆを」の誤脱と見てよい。

寄衣恋

一一五 あきの野に朝ざりがくれなくしかのほかにのみやきゝわたり  
なむ  
(柳営五四一・定家三七二)

の詞書「寄衣恋」は、この歌が「衣」を詠んでいないわけであるから、誤謬である。定家所伝本系統も柳営重槐本系統も、この歌を載せる『統古今集』(九七八)も『万代集』(一七九七)も谷森本『後葉集』(二九六九)も、全て「寄露恋」の題を詞書とする。「鹿」でこそこの歌の題として妥当である。『佳調抜』は類似の漢字の誤写・誤読を犯したのである。

夏のはじめ

一二二 春すぎていくかもあらねど我やどの池の藤なみうつろはぬまに  
(柳営一三五・定家一一九)

の末句「うつろはぬまに」は、『金槐和歌集』の他伝本は全て「うつろひにけり」とする。「幾日もあらねど」(校訂)という条件句に対して「うつろはぬまに」という条件句を重ねるのは不適切で、「うつろひにけり」と承けるのが妥当である。これは、少々前に配されている、



池辺藤花

一九 いとはやも暮ぬるはるか我宿の池の藤なみうつろはぬまに

(柳営一一一・定家一一〇)

の第三句以下と混同したのである。たまたま第三句と第四句が同じ歌形であることが、この誤謬に与つたと見て誤りあるまい。

貞享四年版行本の誤刻をそのまま継承している誤謬本文もある。

二 所詣し侍しに

一四三 千はやぶるいづのを山のだま<sup>レ</sup>檢<sup>レ</sup>やをよろづ代もいろはかはらし

(柳営六四四・定家三六六)

の第三句「たま檢」は意味不通で、「たま椿」即ち「玉椿」とあるべきである。従前の貞享四年版行本の翻刻や校訂では、殆んどが「玉椿」とされたところである。貞享四年版行本を底本とする『私家集大成 中世Ⅰ』の「実朝Ⅱ」に於ては「たま椿」と翻刻され、右に「ママ」と注記されている。定家所伝本系統も柳営亜槐本系統も、殆んどの本が「たまつばき」「玉椿」とする。管見の伝本で「たま檢」とするのは、貞享四年版行本・秋田県立図書館蔵本・秋月郷土館蔵本・無窮会図書館蔵平沼文庫本・東京大学総合図書館蔵南葵文庫本・上田図書館蔵藤蘆文庫本で、茨城大学附属図書館菅文庫本は「檢」を見せ消しとし「椿」と訂正している。『佳調抜』は貞享四年版行本の誤刻をそのまま継承したのである。

『佳調抜』は、柳営亜槐本系統『金槐和歌集』の貞享版行本系列もしくはそれに真淵の評語を書き入れた真淵評語本系列の本文から歌を抜いたものである。そこに大小様々な誤謬が生じている。目移りに因る誤謬、誤読・誤写に因る誤謬が多い。貞享四年版行本以来の誤謬もある。意改と見て

よい異文もある。柳営亜槐本系統に抜粋という著作性本文形成が行われ、誤謬・意改という書写性本文変化も生じた、ということになる。

〈五〉

最後に、この「碩田叢史」所収の『金槐和歌集佳調抜』は、抜粋という著作性本文形成が行われた当の本ではなく、所収本をできるだけ忠実に写した、転写本であると見てよいことを、明らかにしておく。

この『佳調抜』の第七丁裏にあたる、

名所恋の心をよめる(但、九六番詞書)

一〇三 むこのうらの入江のすどり朝なくつねに見まくのほしき君か

な (柳営四八四・定家五一一)

一〇四 我こひは夏のゝすゝきしげゝれどほにしあらねばとふ人もなし

(柳営四九九・定家四一四)

一〇五 時雨ふる大あらきのゝ小篠はらぬればひづゝもいろにいであや

(柳営五〇二・定家三八五)

一〇六 今さらになにをかしのぶ花すゝきほに出し秋もたれならなくに

(柳営五〇八・定家四一五)

の一〇四・一〇五の両首は、二首の歌の上に料紙共紙を貼つて書かれている。その貼紙の下、貼紙抹消以前の二首の全文が判読できる。それは、

我こひは夏のゝすゝき小篠はらぬればひづゝもいろにいであや

(一〇四下)

今さらになにをかしのぶ花すゝきほに出し秋もたれならなくに

(一〇五下)

である。この貼紙抹消された二首を、仮に一〇四下・一〇五下と呼ぶ。

書写者後藤碩田は、書写の際、一〇三「むこのうらの」の歌に続いて一〇四「我こひは」の歌を書写し始め、その第二句の後、誤って一〇五「時雨ふる」の歌の第三句「小篠はら」に移ってしまった。その結果、一〇四下という、誤った歌が出来あがったのである。それに気付かず、そのまま、続く「今さらに」の歌を書写した。一〇五下の歌である。その直後に、写し誤りに気が付き、書写した二首、「我こひは」「今さらに」の歌の上に料紙共紙を貼り、あらためて、一〇四「我こひは」の歌、一〇五「時雨ふる」の歌を正しく写し、あるいは、正しく写した後に貼り付け、続いて、一〇六「今さらに」の歌以下の書写を進めたのである。これが、貼紙抹消と修正書写のある両首をめぐる、書写と修正の経緯である。

この一〇四の第二句から一〇五の第三句への目移りは、『佳調抜』の所拠本において「我こひは」「時雨ふる」の歌が並んでいたから生じたのである。但し、同一の言葉や文字があつてそれを見誤った、という目移りではない。隣の行の第三句の位置へ目移りしたのである。この『佳調抜』は、詞書を上小口に写し、歌を一行に写しているため、歌が詞書で区切られることなく並んでいる。そのことがこの目移りに与っている。

柳営亜槐本系統の貞享四年版行本系列や真淵評語本系列では、この両首は連続して配されていない。一〇四の歌は貞享四年版行本でいうと四九九番、目移りして第三句以下を写した一〇五番歌は五〇二番である。その間に、五〇〇・五〇一の二首がある。しかも、五〇一には、「忍恋」という詞書がある。それに、一〇五下の歌つまり一〇六「今さらに」の歌は、柳営亜槐本系統の貞享四年版行本でいうと五〇八番であり、この間に五首の歌が載り、五〇三番詞書「久恋」・五〇四番詞書「暁恋」・五〇七番詞書「山家後朝恋」・五〇八番詞書「会不逢恋」と、詞書も載る。しかるに、『佳調抜』は、「いろいろにいでめや」に続いて二度「今さらに」という本文を写し

ている（一〇四下・一〇五下、及び一〇五・一〇六）。後藤碩田の写した所拠本においては、貞享四年版行本でいうと五〇二番歌と五〇八番歌とが並んで配されていた、と考える外ない。

最も注目すべきは、結果的に二度写されることになった部分、即ち、

我こひは夏のゝすゝき (一〇四下と一〇四)

小篠はらぬればひづともいろにいでめや (一〇四下と一〇五)

今さらになにをかしのぶ花すゝきほに出し秋もたれならなくに (一〇五下と一〇六)

を比べると、表記や仮名の字母の点に至るまで全く合致する、という事実である（相違するのは、傍線を付した箇所、一〇四下の「ひつとも」と一〇五「ひつとも」の「つ」と踊り字「ゝ」のみである。これは、不注意な誤写である）。誤って二度写した本文が表記や字母の点まで合致するという事実は、「碩田叢史」所収『佳調抜』がその所拠本を極めて忠実に書写したものである、ということを示しているのである。

要するに、『佳調抜』は、最初は一〇四・一〇五として一〇四下・一〇五下の歌を書写し、誤りに気付いて、その上に料紙共紙を貼ってこの二首を抹消し、改めて、一〇四として「我こひは」の歌を、一〇五として「時雨ふる」の歌を、その貼紙に書き写し、一〇六の「今さらに」の歌へと書写を続けた、表記や字母の点まで所拠本に忠実に、というわけである。

因みに、前節において目移りの誤写に因る異文と判断した『佳調抜』の本文の内、一四七番の誤写本文の、

まつぞいでよのとしかへぬらん

と、本来の歌の一四八番の、

まつぞいくよのとしかへぬらん

も、一四七番が「く」を「て」と誤って行間に「く」と訂正を書き添えている他は、表記まで、更に言えば仮名の字母まで、同一である。いま一つ、目移りして誤写した本文である二二番の、

池の藤なみうつろはぬまに

と、誤って目移りした先の一九番の、

池の藤なみうつろはぬまに

も、表記まで同一であり、仮名の字母も殆んど同じである。この二例は、先の例のごとくには貼紙修正されなかったのである。

要するに、「碩田叢史」所収の『佳調抜』は所拠本の本文を表記や字母の点に至るまでそのまま書写したものであることを、碩田がたまたま誤って二度写したことになる本文が露呈しているのである。

奥書に拠れば、この『佳調抜』は、天保五年1834三月一日に、後藤真守（碩田）が、鶴崎の「安達氏の蔵書」を写したという。これは信用してよい。碩田の書写になる「碩田叢史」所収本は、その安達氏蔵本を表記や字母の点に至るまで忠実に書写した本なのである。こう見ると、前節までの検討において指摘した誤写・誤読の誤謬や意改などは、「安達氏の蔵書」で既に生じていたものということになる。中には、碩田の転写時に小規模の書写性本文変化が生じたものもあるが。

## （六）

大分県立図書館蔵「碩田叢史」所収『金槐和歌集佳調抜』は、「鎌倉の右大臣の家集を読み書きつ」という賀茂真淵の序文と実朝歌一六四首の歌本文の「金槐和歌集」の「佳調抜」との二部から成る。これは、『金槐和歌集』諸本の内の柳宮亜槐本系統真淵評語本系列の型であり、真淵の序

文はそのまま、『金槐和歌集』の歌を抜粋したのである。

『金槐和歌集』柳宮亜槐本系統真淵評語本系列には七一九首の歌が収められている。その中から、真淵が付した合点の有る歌を中心に、一六四首の歌を、部類や歌順を変更することなく抜粋したのが、この『金槐和歌集佳調抜』なのである。所拠本である真淵評語本系列の歌と抜粋された歌との実態については、紙幅の都合で、本稿では言及せずに済ませた。拙稿「抜粋諸系統『金槐和歌集』歌番号対照表」を参照したい。

抜粋という本文形成ではあるが、その規模は大きく、著作性本文形成である。「碩田叢史」所収本は、その著作性本文形成を経て書写性本文変化の生じたものということになる。その抜粋という著作性本文形成は、「碩田叢史」所収本が所拠本とした「鶴崎安達氏の蔵書」、もしくはその先行伝本に於いて行われた。その著作性本文形成と同時に、あるいは、以後の転写の間に、誤脱・誤写・誤読といった誤謬や、意改・誤謬の修正といった改変などの、書写性本文変化が生じた、と見てよい。

「碩田叢史」所収本は、外題や目録題を採れば、『鎌倉右大臣家集』が書名である。これは、真淵が評語を書き入れた真淵評語本系列の底本とされた貞享四年版行本の外題である。また、歌本文の内題を採れば、『金槐和歌集』が書名である。真淵評語本系列の伝本で書名を『金槐和歌集』とするものは、架蔵残欠本をはじめ、かなりの数にのぼり、齟齬はない。

大分県立図書館蔵「碩田叢史」所収『金槐和歌集佳調抜』は、柳宮亜槐本系統からの抜粋本という位置付けではあるが、定家所伝本系統・柳宮亜槐本系統、それに、他の抜粋本文である『金槐和歌集秀逸』『鎌倉右大臣家集中抜粋』『鎌倉右府家集抄出』等と並べて、『金槐和歌集』の一つの系統と見るべき著作性本文形成を経たものなのである。

別稿を準備し、『金槐和歌集秀逸』『鎌倉右大臣家集中抜粋』『鎌倉右大臣家集抄出』等の抜粋諸系統の本文についても同様の検討を加え、真淵評語本系列『金槐和歌集』からの抜粋の在りようを解明する所存である。

【注】

- 1 後藤真守(碩田)に関しては、多くの文献があるが、『国書人名辞典』等に拠る。『国書総目録』第二巻の『鎌倉右大臣集をよみていへる』の項には、鎌倉右大臣集をよみていへる かまくらうだいじんしゅうをよみていえる 一冊 類 和歌 著 賀茂真淵 写 大分(碩田叢史の内)・天理(真淵家集)二活 岩波文庫金槐和歌集とあり、『金槐和歌集佳調抜』の項には、金槐和歌集佳調抜 きんかいわかしゅうからちようぬき 類 和歌 写 大分(天保五後藤真守写、碩田叢史の内)とある。

- 3 『大分県立図書館蔵書目録 第二巻』に掲げられた「碩田叢史」の第二二六「Koseki」和226」には、鎌倉右大臣の家集をよみて書く 賀茂真淵 金槐和歌集佳調抜 鎌倉右大臣実朝公歌集 末尾に「天保五年歳三月老日 鶴崎安達氏の蔵書以写者也 後藤真守」と有り。 [他、五点の書名、省略] 30丁 26・5頁

- 4 とある(原、横書)。「筑波大学平家部会論集」第七集(平成十一年三月)『金槐和歌集』の伝本分類に関する私見は、『金槐和歌集』貞享本系統本文考——所載歌と歌順の吟味——(『筑波大学平家部会論集』第五集・平成七年十一月)、『金槐和歌集』定家本系統本文考——四系統分類と定家本系統の系列分類——(『筑波大学平家部会論集』第六集・平成九年六月)及びそれらを整理した口頭発表『金槐和歌集』の伝本分類(筑波大学日本文学会例会・平成十年十一月七日・筑波大学)に於いて提示した。
- 6 『私家集大成 中世I』(昭和四九年七月)、『37実朝I 金槐和歌集(定家所伝本複製)』、『38実朝II 金槐和歌集(貞享四年版本)』、久保田淳氏・浜口博章氏の担当。
- 7 「著作性本文形成」・「書写性本文変化」の定義については、拙稿『平家物語』

- 8 の成立基盤——その書承的側面——(『平家物語の成立』平成五年十一月)をご参照ありたい。勅撰集は、『新編国歌大観 第一巻 勅撰集編 歌集』(底本は集によって異なる)に拠る。
- 9 谷森本『後葉集』は、図書寮叢刊『後葉和歌集』(昭和五一年二月)に拠る。『千五百番歌合』は、『新編国歌大観 第五巻 歌合編』(底本、高松宮蔵南北朝写本)に拠る。
- 10 『万代集』は、『新編国歌大観 第二巻 私撰集編 歌集』(底本、竜門文庫本)に拠る。
- 11 『歌枕名寄』は、古典文庫(底本、万治二年版行本)に拠る。
- 12 日本古典文学大系『山家集 金槐和歌集』(小島吉雄氏校注。昭和三六年四月)『雲葉集』は、『群書類従 巻第一五二』所収元版本に拠る。
- 13 (付置)
- 14 ご收藏書の閲覧と複写配布をご許可くださった、大分県立図書館に、心より御礼申しあげる。

(いぬい よしひさ 筑波大学 文芸・言語学系 教授)